

豊沢遺跡

—第12次発掘調査報告書—

2019

姫路市教育委員会

序

豊沢遺跡は、JR姫路駅の南約300mの一带に位置します。この遺跡は明治年間に中国の新王朝の貨幣である貨泉が採集されたことで有名でした。それ以後は、長く発掘調査をされることもありませんでしたが、近年の建築工事等に伴う調査によって、その内容について幾つもの新しい所見を得ることができました。

本書は、豊沢遺跡で平成30年5月から8月にかけて実施した発掘調査の成果をまとめたものです。今回は弥生時代中期や後期、古墳時代初めの集落に関連する数多くの遺構を調査することができました。遺構の数が非常に多く、かつ密集していたことから、今回の調査地点一带が当時の集落の中心に近い場所であることがわかりました。これらは、地域の歴史をより豊かなものにするとともに、学問的にも大変意義のあるものであると考えています。

最後になりましたが、今回の発掘調査事業の実施にあたり多大なご協力を賜りました学校法人摺河学園をはじめ、関係各位に心から御礼申し上げます。

平成31年(2019年) 3月31日

姫路市教育委員会

教育長 松田 克彦

例 言

- 1 本書は、姫路市豊沢町に所在する豊沢遺跡(県遺跡番号020457)第12次調査の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、姫路市豊沢町83番地における播磨高等学校校舎建設工事に伴い、学校法人摺河学園 理事長 摺河 祐彦と委託契約を締結し、姫路市教育委員会が実施した。現地での本発掘調査は、姫路市埋蔵文化財センター福井 優が担当した。
- 3 本発掘調査は、平成30年 5月29日から同年8月4日にかけて実施した。調査面積は604㎡である。
- 4 本書の編集・執筆は福井が行い、遺構および遺物写真は福井が撮影した。
- 5 本報告にかかわる調査の記録、出土遺物などは、すべて姫路市埋蔵文化財センターで保管している。

凡 例

- 1 発掘調査で行った測量は、世界測地系(測地成果2000)に準拠する平面図直角座標系第V系を基準とし、数値はm単位で表示している。
 - 2 本書で用いる標高は、東京湾平均海面(T.P.)を基準とし、使用する方位は世界測地系の座標北である。
 - 3 本書で使用した地形図は、姫路市基本地形図を使用した。
 - 4 遺構の略称は、以下のように呼称している。
- SH: 竪穴建物、SK: 土坑、SP: 柱穴・小穴、SD: 溝、SX: 溝状遺構
- 5 遺構・土層等の呼称は、調査時の遺構番号を基本とするが、整理に際して変更したものもある。
 - 6 土色と土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄編2003『新版 標準土色帳 25版』日本色研事業株式会社に準拠した。
 - 7 土器の図化に関しては、小片の場合でも復元的に図化したものを掲載している。その際、文様などについては、残存部位のみの図化にとどめている。ただし、直線文などのように、文様の全容がある程度予想できるものについては、復元して図化しているものもある。また、拓本を用いた破片の実測図は、右から外面の拓本、断面図の順に配列している。
 - 8 遺物番号は基本的に通し番号とする。
 - 9 本書に記載した石器の重量計測には大和製衡株式会社製HB3000を使用した。
 - 10 本書に用いた遺物番号は、本文・挿図・写真図版ともに一致する。

本文目次

序・例言・凡例

第1章	調査の経緯	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	当該地周辺における主な既往の調査	1
第3節	本発掘調査(第1 2次調査)	1
第2章	調査の成果	2
第1節	調査概要	2
第2節	遺構・遺物	2
第3章	まとめ	4

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

調査の経緯 姫路市豊沢町83番地において、校舎の建替え(面積約626㎡)が計画された。計画地は周知の埋蔵文化財包蔵地である豊沢遺跡(遺跡番号020457)に該当している(図版1)。

平成30年2月22日付で学校法人摺河学園より文化財保護法第93条に基づく届出が姫路市教育委員会生涯学習部文化財課になされ、遺跡の取り扱いについての協議が行われた。平成30年4月5、6日に事業地内の5箇所(遺構の有無および残存状況を把握するための確認調査を実施した(遺跡調査番号20180010(11次調査)、図版1-3))。調査の結果、4箇所(遺構・遺物)を確認し、さらに既存建物の基礎よりも深い部分にも残存していたことから、工事により遺構面が影響を受ける範囲の取り扱い協議を行った。協議の結果、遺構の現地保存が困難な部分の記録保存のための本発掘調査を実施することとなった。平成30年4月12日付兵庫県教育委員会からの通知に基づき、平成30年5月28日付で姫路市と事業者で委託契約を締結し、対象となる範囲の本発掘調査を開始した(遺跡調査番号20180088)。豊沢遺跡における発掘調査は今回で12次を数える(図版1-2・3)。調査面積は604㎡である。

第2節 当該地周辺における主な既往の調査

第2次調査 豊沢遺跡で初めて実施された本発掘調査である(写真図版1-1)。調査地東側から西側へ緩やかに傾斜する微高地を確認し、弥生時代中期後半に洪水により埋没したことがわかった。洪水砂中には大量の弥生土器のほかにはサヌカイト製の打製石鎌・打製石庖丁・打製石剣をはじめ、磨製石庖丁や数種類の石斧が伴っており(写真図版1-2)、微高地上に大型の集落が存在する可能性が高いと想定するに至った。また、微高地の縁辺では、ほぼ同時期の完形に近い土器が出土する溝を検出した(写真図版1-3)。

第4次調査 平成25年度に実施した調査で、今回の調査区の西側約50mに位置する(図版1-3)。弥生時代中期と古墳時代初頭の集落跡を検出した。このうち、SK8とした弥生時代中期後半の土坑からは焼土塊とともに鉄片、褐鉄鉞、ガラス滓など鍛冶に関連する微小遺物が出土した。鍛冶炉こそ検出しなかったが、鉄器生産の可能性をかなり色濃く示す資料となった(姫路市埋蔵文化財センター編2013)。

第7次調査 平成27年度に実施した調査で、今回の調査区の南西約90mに位置する(図版1-3)。4次調査と同様、弥生時代中期と古墳時代初頭の集落跡を検出した。このうち、SK32とした平面楕円形で浅いくぼみ状を呈する遺構は、床面や周囲が被熱により灰赤色、明赤色を呈し焼土化することで硬化していた。また、埋土には焼土や炭化粒を多く含んでいた(姫路市埋蔵文化財センター編2014・2015)。注目すべきは、この埋土を水洗選別したところ、わずかにガラス滓や骨片が出土し、さらに磁石を用いたところ、鉄片と思われる金属片を確認できた点である。これらの状況から本土坑では1000℃を越す高温を伴う作業が行われたと考えることができる。極めて簡便な構造ではあるが、小規模の鍛冶関連遺構である可能性が指摘できよう。なお、本遺構で実施した考古地磁気年代の測定では西暦1～50年といった年代が与えられ、五斗長垣内遺跡(兵庫県淡路市)や会下山遺跡(同県芦屋市)よりもわずかにさかのぼるとの結果を得ている(森永2014)。

第3節 本発掘調査(第12次調査)

第12次調査 兵庫県教育委員会からの発掘調査の指示・勧告に基づき、主に校舎の基礎工事により地下の遺構・遺物に影響が及ぶ範囲の調査を実施した(図版1-2)。また、耕作土と床土(土壌化層)および既設校舎による攪乱土については主に重機による掘削を行い、遺物の採集にとどめた。それより下位については、人力によって精査した。

現地での発掘調査から室内での整理作業終了までの調査体制は以下のとおりである。

姫路市教育委員会事務局

教 育 長 松田 克彦
 教 育 次 長 名村 哲哉
 生涯学習部長 岡田 俊勝
 文化財課長 花幡 和宏
 課 長 補 佐 大谷 輝彦 (調整)
 技 師 黒田 祐介 (調整)

姫路市埋蔵文化財センター

館 長 前田 光則
 課 長 補 佐 岡崎 政俊 (庶務)
 係 長 森 恒裕 (調整)
 技 術 主 任 福井 優 (調査)

第2章 調査の成果

第1節 調査概要

調査地の現況 調査地の現況は既設校舎除却後の更地で、標高は約10mである。調査地の大半は既存校舎の基礎による影響をかなり受けており、調査区の壁面でも土層断面を良好に確認できた箇所はほとんどなかった。検出した地山の標高は約9mである。

検出遺構 今回の調査で検出した遺構は、竪穴建物20棟、土坑37基、ピット135基、溝10条である。このうち、弥生時代中期前葉のなかでも古段階(以下、弥生時代中期初頭という。)を示す良好な資料を得ることができたため、本書では当該期の遺構・遺物を中心に述べることにする。

第2節 遺構・遺物

竪穴建物 ここでは、弥生時代中期初頭のSH1を中心に延べ、その他は表1にまとめている。

SH1 (図版4-1、8-1)

形状・規模 全体的な平面形は不明であるが、不整な円形とも捉えることができよう。検出当初は土坑として認識していたが、規模と壁面の立ち上がりの角度などから竪穴建物として積極的に評価したい。なお、床面上で燃焼施設や柱穴などの付帯施設は確認していない。検出面からの深さは約30cm、床面の標高は約8.7mである。

出土遺物 広口壺1～4、甕5～9、甕蓋10、鉢11、サヌカイト製の打製石庖丁12が出土した。このうち、広口壺胴部3の突帯上の刻目に布目がわずかに残る。12については、両面にいわゆるコーングロスと呼ばれる光沢がみえる。また、抉りのない側縁は鋭利ではないものの、尖端を意識したかのような新しい剥離面があることから、打製石剣への転用の可能性も残る。33.00gを量る。

時 期 弥生時代中期初頭に位置づけられる。

遺構名	平面形	規模(m)		主柱穴(基)	燃焼施設	時期	備考	遺構名	平面形	規模(m)		主柱穴(基)	燃焼施設	時期	備考	
		径(辺)	深さ							径(辺)	深さ					
SH1	円形	-	0.31	-	-	弥生時代中期前葉	サヌカイト剥片(9.83g)	SH11	円形	-	0.05	-	-	弥生時代中期後半	周壁溝多条	
SH2	円形	4.4	0.07	2~	中央土坑	弥生時代中期後半	SH13と重複 サヌカイト剥片 (15.08g)	SH12	方形	-	0.17	-	-	-	-	サヌカイト剥片(1.88g)
SH3	隅丸方形	-	0.05	-	-	弥生時代中期前葉?	サヌカイト剥片(1.89g)	SH13	方形	4.6~	0.18	3~	中央土坑	古墳時代初頭	SH2と重複 サヌカイト剥片等 (43.67g)	
SH4	方形	2.9~	0.21	2~	-	-	-	SH14	-	-	-	-	-	-	サヌカイト剥片(8.93g)	
SH5	方形	3.5~	0.3	3~	-	弥生時代中期後半	サヌカイト剥片(0.87g)	SH15	方形	3.0~	0.07	1~	中央土坑	古墳時代初頭	サヌカイト剥片等(30.45g)	
SH6	方形	2.9	0.18	-	-	弥生時代中期前葉	-	SH16	-	-	0.05	-	-	-	-	
SH7	-	-	-	2~	イマル土坑	弥生時代中期後半	サヌカイト剥片(17.11g)	SH17	方形	-	-	-	-	-	周壁溝のみ	
SH8	円形	-	-	-	-	弥生時代中期後半	周壁溝多条 サヌカイト剥片 (79.21g)	SH18	方形	2.8	0.08	1~	-	-	-	サヌカイト剥片(31.56g)
SH9	円形	-	0.06	-	-	-	-	SH19	方形	-	0.26	2~	-	-	サヌカイト片(8.49g)	
SH10	隅丸方形	1.8	0.35	-	-	弥生時代中期後半	-	SH20	-	-	-	-	-	-	周壁溝のみ	

表1 竪穴建物一覧

土 坑 SK19のみについて述べ、その他は表2にまとめている。調査時には全ての遺構に番号を付したが、本書では時期が判然としないものについてはふれていない。

SK19 (図版6-1、8-2)

形状・規模 径約0.95mの平面円形を呈する。深さは検出面から約0.9mまでは調査を行ったが、それ以下については工事による影響を受けないために、地中に保存することとなった。土師質焼成の把手付鍋13は3層上面にあった主に炭化粒が溜まるたわみ(2層)の上面で出土した。

出土遺物 土師質焼成の把手付鍋**13**が出土した。偏球形を呈する胴部外面には正格子タタキが明瞭に残るのに対し、内面には目立った有文のオサエの痕跡はなく、円形もしくは不整な円形のわずかな窪みがみられることから、無文の当て具を使用した可能性がある。口縁部は緩やかなくの字状に外反し、正面にはその口縁部を折り曲げた注ぎ口がある。把手は截頭牛角形で、上面には切り込みが施されている(写真図版8右列下段)。把手の挿入方法については、内面にみえるわずかな接合痕から、把手の根本に突起を作り出し、それを外側から胴部に挿入するB技法(杉井2003)と思われる(写真図版8右列中段)。把手よりもやや下がった位置には沈線が一条巡る。類似する例として、細部はやや異なるものの、平成8年度に調査された市之郷遺跡E区SH18出土資料(山田2005、図版45-792)が挙げられる。以上の特徴と先行研究(今津1987・1994他)を勘案するとこの把手付鍋は韓式系土器として位置付けられる。なお、本土坑の付近で遺構検出作業中に、遺構から遊離した状態で、韓式系土器甕**14**と須恵器甌もしくは鍋の胴部片**15**が出土した。**14**には正格子タタキが、**15**には縄蓆文が残る。

時期 大庭寺遺跡TG232号窯灰原下層(岡戸1995)段階に近く、古墳時代中期(5世紀後葉)に位置づけられる。

遺構名	平面形	規模(m)		土器以外の出土遺物	時期	遺構名	平面形	規模(m)		土器以外の出土遺物	時期
		径(辺)	深さ					径(辺)	深さ		
SK1	長楕円形	1.0×1.8～	0.3	サスカハ剥片(1.46g)	弥生時代中期前葉	SK11	隅丸長方形	0.85×1.3	0.05	サスカハ剥片(10.12g)	弥生時代中期後半
SK2	隅丸長方形	0.95×	0.3		弥生時代中期前葉	SK12	隅丸長方形	1.15×1.95	0.7	サスカハ剥片(35.35g)	弥生時代中期後半
SK3	長楕円形	1.25×2.35	0.55	サスカハ剥片等(32.26g)	弥生時代中期前半	SK13	隅丸長方形	1.9×1.2	0.6	サスカハ剥片等(70.00g)	弥生時代中期後半
SK4	楕円形			サスカハ剥片等(20.47g)	弥生時代中期後半	SK14	隅丸長方形	1.45×1.6～	0.45	サスカハ剥片(8.93g)	弥生時代中期後半
SK5	不整円形	1.25×1.45	0.7	サスカハ剥片(9.64g)	弥生時代中期後半	SK15	不整円形	1.4×1.4	0.3		弥生時代中期後半
SK6	隅丸長方形?			サスカハ剥片(1.22g)	弥生時代中期後半	SK16	隅丸長方形?	0.8～×1.25～	0.15	サスカハ剥片等(25.61g)	弥生時代中期後半
SK7	隅丸長方形	1.7×2.7	0.55	サスカハ剥片(8.50g)	弥生時代中期後半	SK17	不整円形			サスカハ剥片等(76.27g)	弥生時代中期後半
SK8	隅丸長方形	1.15×1.1～	0.3	サスカハ剥片等(9.24g)	弥生時代中期後半	SK18	不整円形	1.2×1.3	1.15～		古墳時代中期後半
SK9	楕円形	0.4×0.6	0.15		弥生時代中期後半	SK19	円形	0.95	0.85～	韓式系土器	古墳時代中期後半
SK10	不整円形	0.7×0.8	0.4		弥生時代中期後半						

表2 時期が明確な土坑一覧

ピット 柱穴もしくは小土坑とでもいうべき遺構であるが、今回の調査で検出したこれらの遺構の大半が既設校舎の建設によって既に削平を受けており、それぞれの性格や時期の認定については困難であった。ピット内から出土したサヌカイト剥片等の総重量は42.19gを量る。

溝・溝状遺構 土層断面の観察から明らかに水流を伴うものを溝、そうでないものを溝状遺構とする。ここでは溝状遺構SX1についてふれ、その他については表3にまとめている。

遺構名	断面形	規模(m)		時期	備考
		幅	深さ		
SD1	逆台形	0.55	0.5	弥生時代中期後半	SK17との切合い不明
SD2	逆蒲鉾型	0.6	0.4	11～12世紀代	N-27° -E, SD3と一連
SD3	逆蒲鉾型	1.8	0.5	11～12世紀代	N-27° -E (SK3・15を切る)

表3 時期が明確な溝一覧

SK19 (図版6-1、8-2)

形状・規模 調査区のはほぼ中央を北西-南東方向に伸び、東西両端での底面のレベル差はない。当初は幅約1.4m、深さ約0.4mを測る南側の掘込みを掘削し、ある程度埋没した段階で北側の掘込みが改めて掘削されたようである。後述するような埋没過程を経て、最終的に幅約2.8mとなった。

堆積状況 土層断面の観察から、大きく3段階に大別できる(図版6-3、写真図版7-3・4)。まず、本遺構掘削後しばらく経ち、やや埋没した段階で最初の炭層が見られる。その炭層を地山起源の土壌で埋め戻した後に、再び薄い炭層が見られる。そして、その炭層も再び埋め戻されて、最終的に埋没したようである。土層断面の観察では水流を示す痕跡が確認できなかったことから、水路として掘削されたものではないことは明らかである。

遺物出土状況 調査時には、埋土の層界に堆積する炭層を鍵層として、図版6-3の7・8・9層として大別し、遺物の取り上げに努めた。特に先述の炭層上面では、弥生時代中期前葉の良好な土器群が出土した。これらの土器については、完形もしくはそれに近い形に復元できる個体が比較的多い点、煮沸具以外の器種にも二次的な被熱痕跡があるものが存在する点、主に甕の底部が残存している個体については比較的高い割合で焼成後の穿孔がみられる点等の特徴が見受けられる。このことから、SX1の埋没過程は、飲食の後に多くの土器が穿孔・投棄された後に火にかけられるという一連の行為が数回行われていたことを示すと考えることができる。現在のところ、これらの行為の意味については不明といわざるをえず、今後の課題としたい。

出土遺物 遺物はコンテナ(天昇電気工業製テンバコP18、約18^{リットル})に約30箱出土した。

16～57は7層出土である。このうち16～19の甕については先述の炭層からわずかに遊離して出土した。16はいわゆる瀬戸内型の甕で、胴部上半に櫛描き流水文がみえる。20は広口壺で、頸部と胴部中央付近にそれぞれ7条のヘラ描き沈線を施す。外面に二次被熱の痕跡がみえる。21～27は甕である。21は口縁部を強く折曲げ、胴部上半には5条のヘラ描き沈線を施すが、やや稚拙な印象を受ける。底部は焼成後に穿孔されている。器形・胎土ともにやや違和感を覚える。22・23は瀬戸内型甕で、22は約6リットル、23は約4リットルと法量に分化がみられる。22の底部には焼成後の穿孔がみえる。24の波状文は半裁竹管によるもの。25～26の底部は既に指摘されている(大手前大学氏額研究所編2007,p489)ように、胴部下半をある程度成形した後に底面を充填していることがわかる。27の底部外面には植物圧痕が残る(写真図版10右下) 28は甕蓋である。29は器種不明ないわゆる粘板岩製石製品で、表面に成形時の擦痕が残る。30はサヌカイト製打製石庖丁で、折損している。両面にコーングロスがみえる。27.20gを量る。31～35は広口壺の肩部、もしくは胴部上半で、31の2条の貼付突帯上には布目による押圧痕が(写真図版11右上)、32の上段の突帯の剝離した部分に割付け線と思われるヘラ書き沈線がそれぞれみえる。33はやや古厶を呈する。33・34の施文は半裁竹管による。38～46は甕である。胴部上半のヘラ書き沈線に小条のもの39・42・46と多条のもの40・43～45が混じる。41の口縁部はごくわずかに外反する。46は山形の口縁部からやや下がった位置に鏢状とも思える突帯がある。口縁部は摘み出しによる。器形・胎土共に当地のものとは異なり、外来系のもと考えられるが故地については不明である。47は甕蓋、48は鉢である。49の広口壺内面には波状の突帯がみえる。50～52は胴部で、51には底部に焼成後の穿孔がみえる。53は無頸壺で、胴部には櫛歯状の工具による沈線を施す。なお、口縁部粘土帯が剝離した箇所穀物外皮の圧痕が残る。54～57は甕である。54の口縁部には楕円形の刺突を施す。56・57は無文である。本層からは残核を含めて125.45gのサヌカイトが出土している。

58～60は8層出土である。58は広口壺の頸部で、7条の突帯上におそらく二本一対の棒状浮文を貼付けている。59は甕の底部。60は甕蓋である。

61～74は9層出土である。ここで特筆すべきは、いわゆる粘板岩製の磨製刃器72である。全体像は不明ながら、復元幅約6cmで幅広い点から短剣ではなく、目釘式石戈(寺前2010,p96-110)である可能性がある。このタイプの石戈は北東部九州と大阪湾沿岸に分布域を形成し、弥生時代前期末から中期初頭を中心にみられる。SX1とはほぼ同時期であるといえる。この目釘式石戈は初期の青銅器生産の関わりが指摘されており、4次調査SK8、7次調査SK32と合わせて当遺跡における金属器生産を示唆する重要な資料といえる。73・74はサヌカイト製打製石鏃で、73は凹基式で1.4g、74は平基式で1.2gを量り、加えて、残核を含む407gのサヌカイトが出土している。

時期 3段階の埋没過程を示すが、いずれも弥生時代中期初頭に帰属すると考えられる。

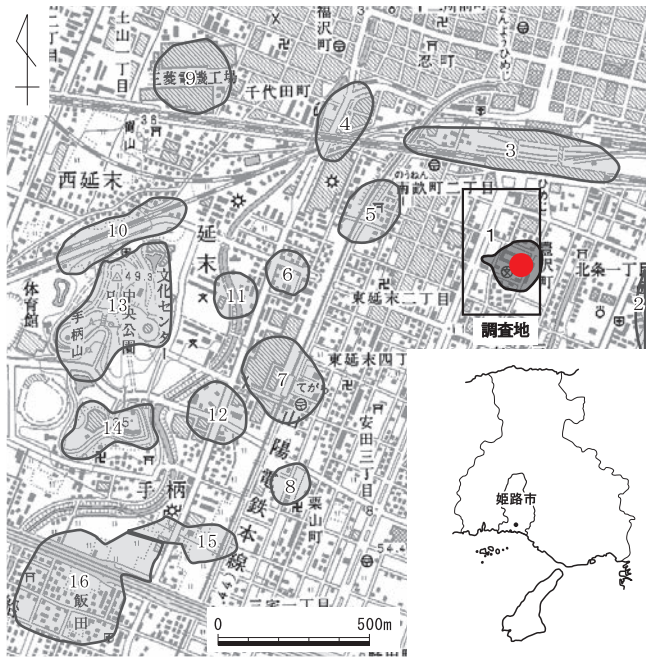
第3章 まとめ

弥生時代 今回の調査で初めて中期前葉のなかでも古相に位置付けられる遺物が遺構から出土した。当該期の基準資料については、これまでは旧河道出土資料中から型式学的に分離されたもの(岡崎1985)を使用しており、良好な資料を得ることができたことが最大の成果の一つといえる。また、堅穴建物と思われるSH1や土坑、それに祭祀の痕跡を思わせるSX1を検出するとともに、当該期の大量の土器や石器、そして、石戈の可能性がある磨製刃器の存在などから、豊沢遺跡は出現当初から当該地域における拠点的な集落であった可能性を指摘できる。最後に、本書で記載が叶わなかった遺構を含めると、12次調査では1692.62gのサヌカイトが出土したことを付言しておく。

古墳時代 SK19で出土した韓式系土器の把手付鍋13は、豊沢遺跡では初例となる。当遺跡の東約1.7kmに広がる市之郷遺跡でも渡来人に関連する遺構・遺物が確認されており(秋枝1999、山田編2005、姫路市埋蔵文化財センター編2018)、その範囲が当遺跡までおよぶことがわかった。

[引用・参考文献] 秋枝芳1999 『9.姫路駅周辺遺跡』多田暢久編『TSUBOHORI 平成6年度(1994)姫路市埋蔵文化財略報』姫路市教育委員会、今津啓子1987 『大阪湾沿岸地域出土の朝鮮系軟質土器』岡崎敬先生退官記念事業会編『東アジアの考古と歴史』下 岡崎敬先生退官記念論集、同1994 『渡来人の土器-朝鮮系軟質土器を中心として』荒木敏夫編『ヤマト王権と交流の諸相』古代王権と交流5 名著出版、大手前大学史学研究所編2007 『弥生土器集成と編年-播磨編』六一書房、岡崎正雄1985 『弥生時代前期』深井明比古・岡崎正雄編『丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書-本文編』兵庫県文化財調査報告書第30冊 兵庫県教育委員会、岡戸哲紀1995 『大庭寺遺跡の軟質系土器について』岡戸哲紀編『陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ -近畿自動車道松原さすみ線建設に伴う発掘調査報告書(財)大阪府文化財協会調査報告書 第90輯 大阪府教育委員会、小林青樹2017 『倭人の祭祀考古学』新泉社、酒井清治1998 『日韓の甕の系譜から見た渡来人』植崎彰一先生古稀記念論文集刊行会編『植崎彰一先生古稀記念論文集』真陽社、杉井健2003 『朝鮮半島系渡来文化の伝播-普及と首長系譜変動の比較研究 平成12年度～平成14年度科学研究費補助金(基盤研究C2)研究成果報告書』熊本大学文学部、寺井誠2016 『平成25～27年度(独)日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C) 日本列島における出現期の甕の故地に関する基礎的研究(課題番号18320131)研究成果報告書』、寺前直人2010 『武器と弥生社会』大阪大学出版会、姫路市埋蔵文化財センター編2013 『豊沢遺跡 -第4次発掘調査報告書』姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第9集 姫路市教育委員会、同編2018 『市之郷遺跡第16次発掘調査報告書』姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第59集 姫路市教育委員会、松本正信・加藤史郎1971 『辻井遺跡発掘調査報告書』姫路市教育委員会、森永速男2014 『第3章 考察 豊沢遺跡第7次調査 SK32焼土の考古地磁気年代』姫路市埋蔵文化財センター編『豊沢遺跡 -第7次発掘調査報告書』姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第25集 姫路市教育委員会、山田清朝編2005 『姫路市市之郷遺跡-JR山陽本線等連続立体交差事業に伴う発掘調査報告書Ⅰ』兵庫県文化財調査報告書第286冊 兵庫県教育委員会

図版 1



1. 周辺の弥生時代の遺跡 (S=1:25,000)

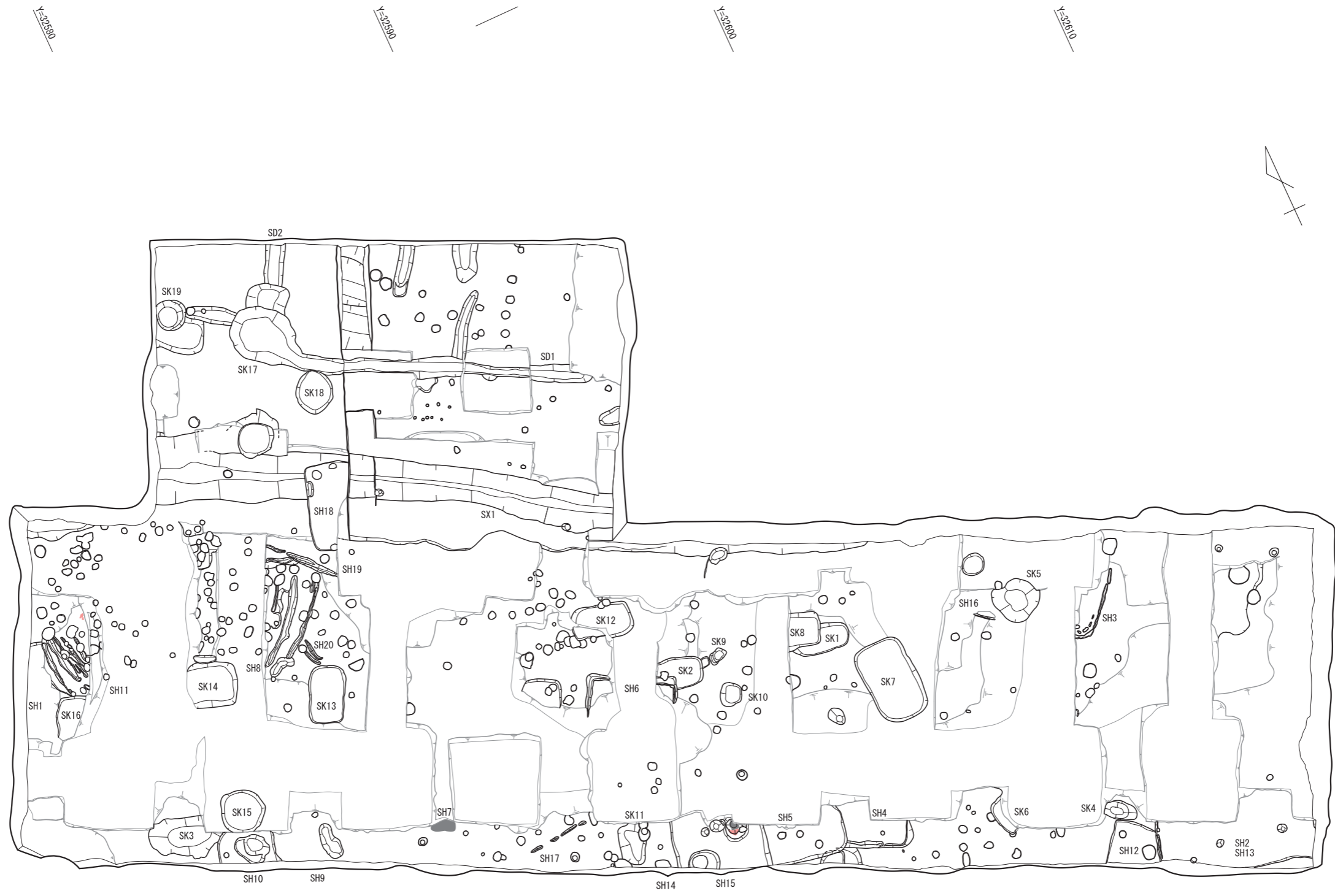
- 1 豊沢遺跡
- 2 北条遺跡
- 3 豆腐町遺跡
- 4 南畝町遺跡
- 5 君田遺跡
- 6 村淵遺跡
- 7 黒表遺跡
- 8 古屋敷遺跡
- 9 千代田遺跡
- 10 西延末遺跡
- 11 橋詰遺跡
- 12 小山遺跡
- 13 手柄山北丘遺跡
- 14 手柄山南丘遺跡
- 15 竹の前遺跡
- 16 畑田遺跡



2. 調査区位置図 (S=1:5,000)



3. 既往の調査 (1:2,000)



Y=32370

X=130460

X=130470

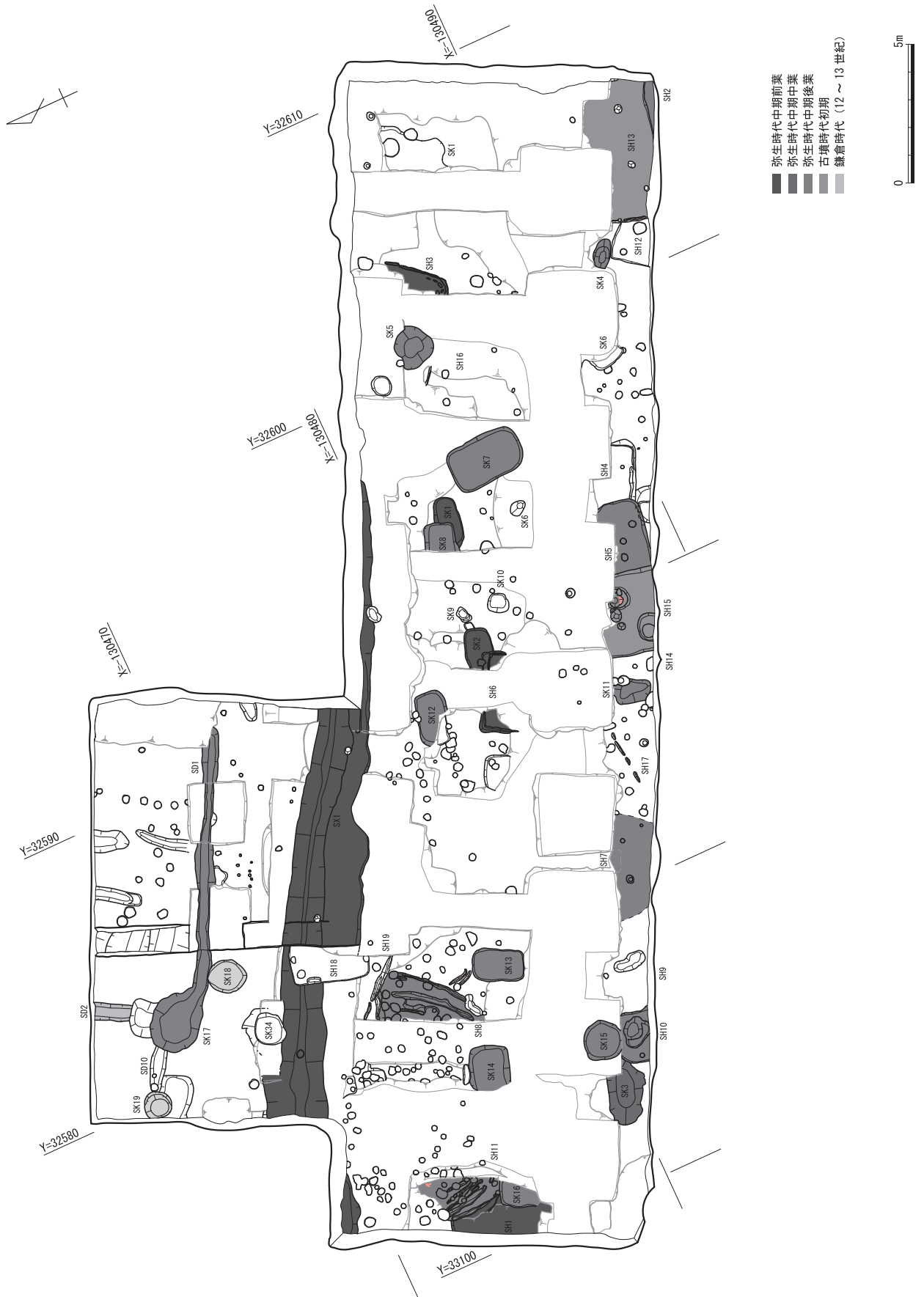
X=130480

X=130490

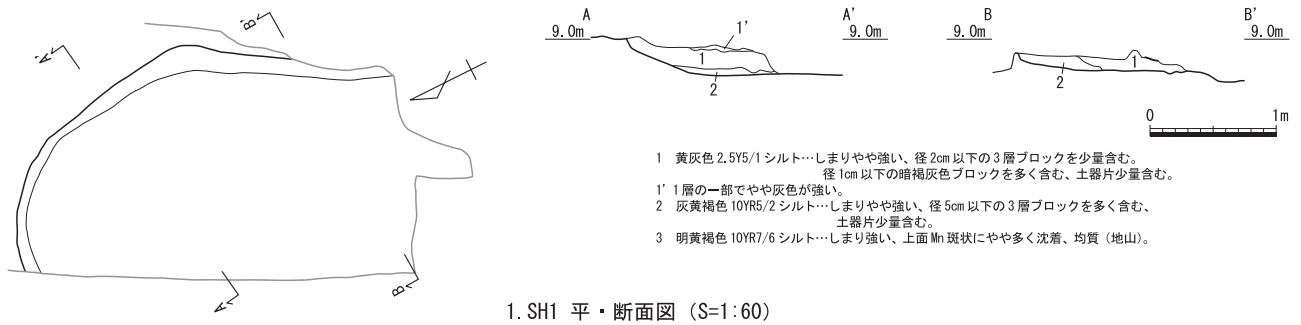
※遺構名については本書に記載しているもののみ表記している。

0 5m

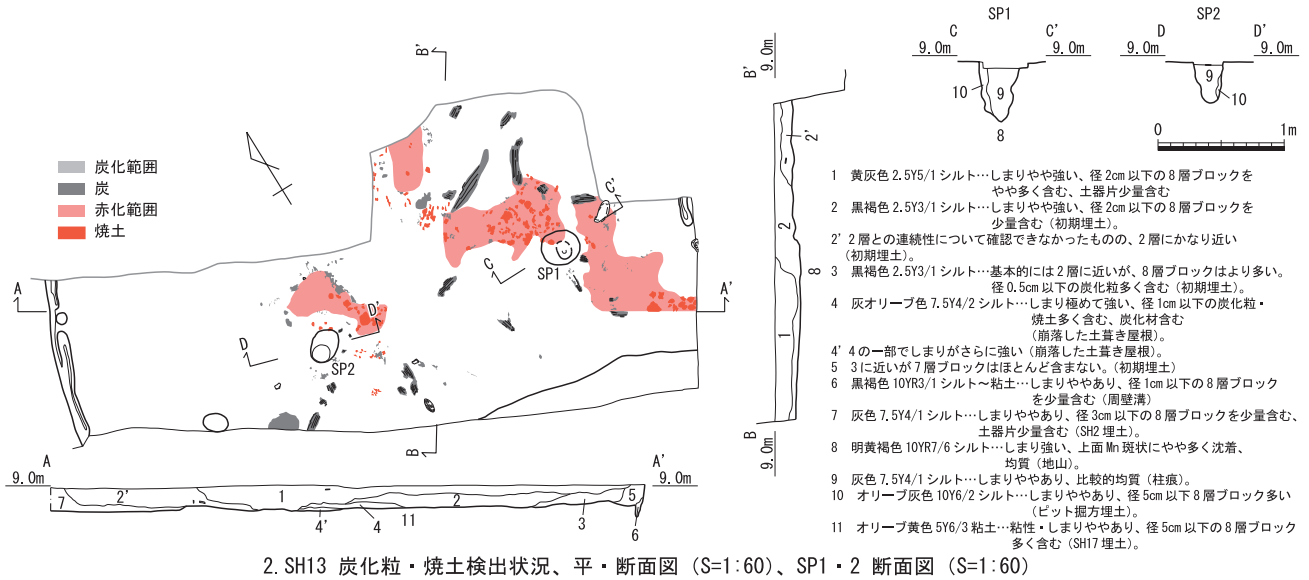
調査区全体図 (S=1:150)



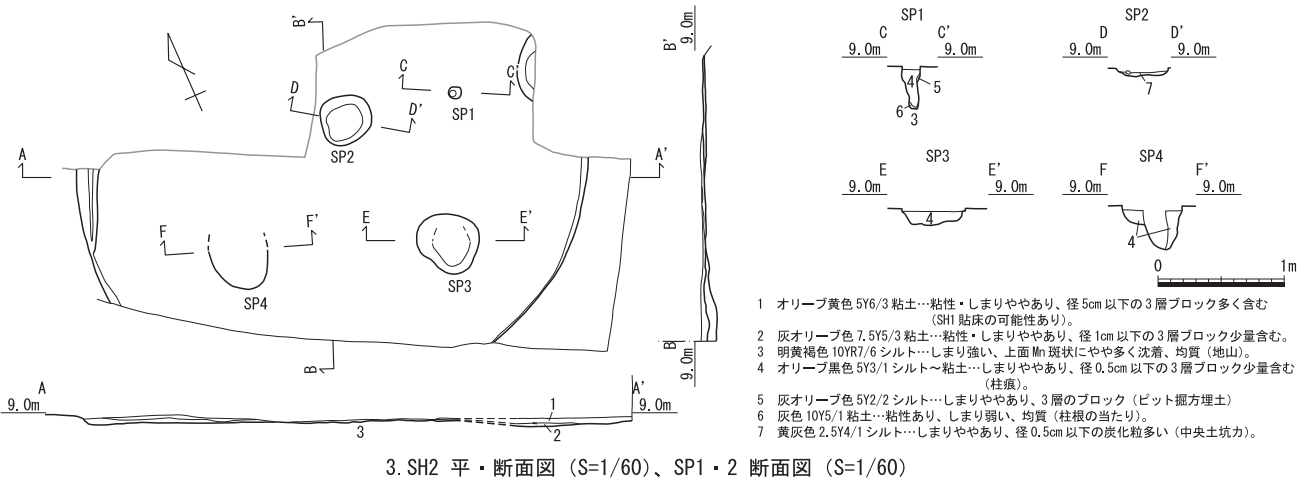
各時期・時代毎の全体図 (S=1:200)



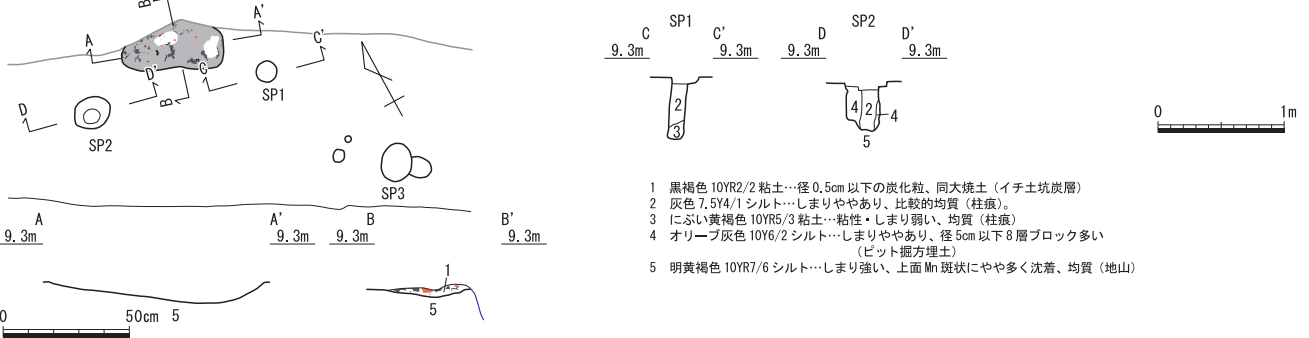
1. SH1 平・断面図 (S=1:60)



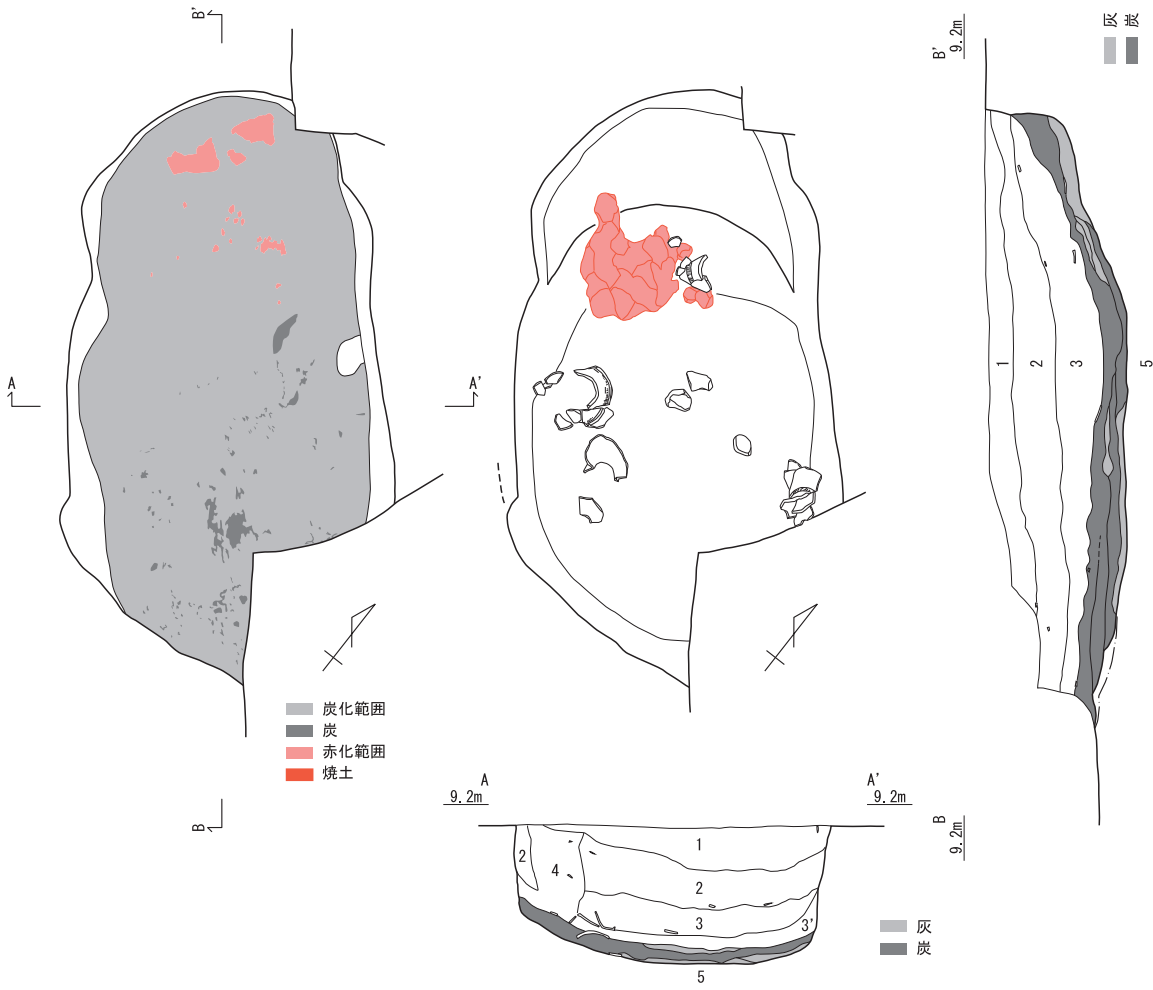
2. SH13 炭化粒・焼土検出状況、平・断面図 (S=1:60)、SP1・2 断面図 (S=1:60)



3. SH2 平・断面図 (S=1:60)、SP1・2 断面図 (S=1:60)



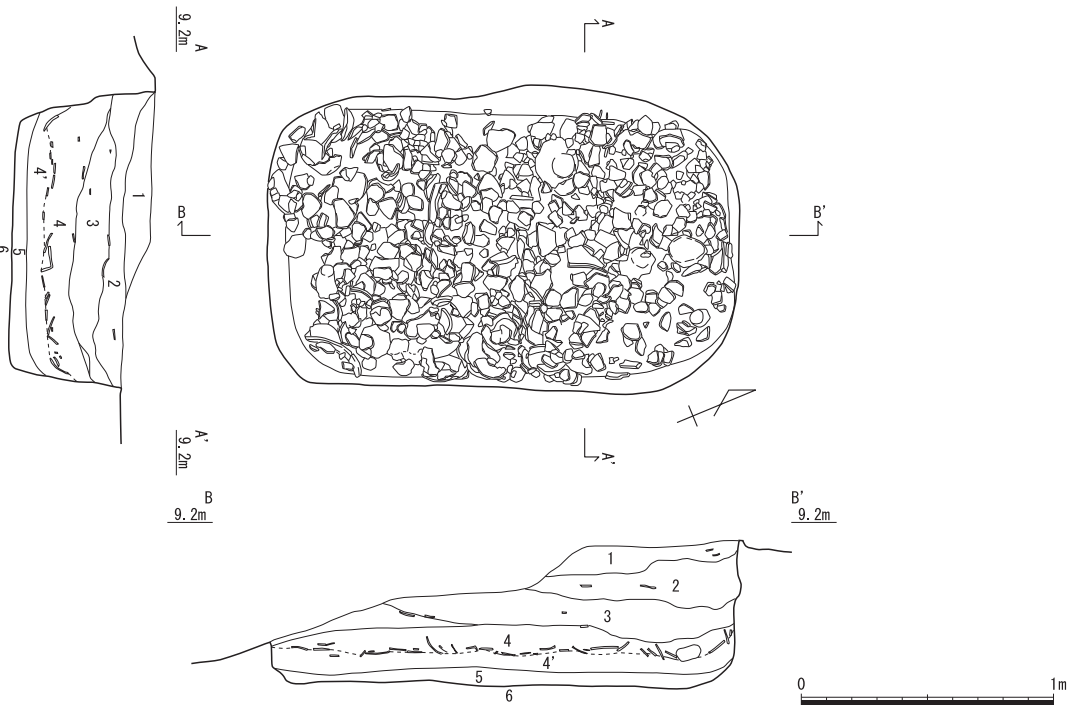
4. SH7 平面図 (S=1:60)、イチマル土坑 断面図 (S=1:30)、SP1・2 断面図 (S=1:60)



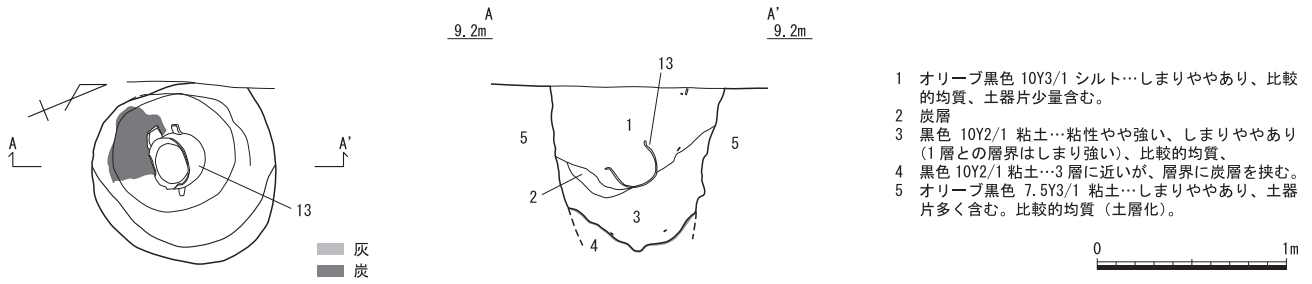
- 1 黒褐色 10YR3/1 シルト…しまりやや弱い、径 1cm 以下の焼土多く含む、土器片少量含む。
- 2 黒色 10YR2/1 シルト…しまり強い、径 1cm 焼土少量含む、土器片少量含む
- 3 黒色 10YR2/1 シルト…しまり強い、比較的均質
- 4 灰色 5Y4/1 シルト…しまり強い、径 1cm 以下の焼土少量含む、径 5cm (根による攪乱力)
- 5 明黄褐色 10YR7/6 シルト…しまりややあり、均質 (地山)

1. SK3 炭・焼土検出状況、遺物出土状況 断面図 (S=1:60)

- 1 オリーブ黒色 5Y3/2 シルト…しまりやや強い、径 3cm 以下の 6層アロワック多く含む、土器片少量含む。
- 2 オリーブ黒色 5Y3/2 シルト…しまりやや強い、径 1cm 以下の 6層アロワック・同大炭化粒多く含む、土器片少量含む。
- 3 1層に近いが 6層アロワック少ない。
- 4 オリーブ黒色 5Y3/1 シルト…しまりややあり、土器片非常に多い。
- 5 10YR6/4 に近い黄褐色…しまりややあり、5層を利用した埋戻土。
- 6 明黄褐色 10YR7/6 シルト…しまり強い、上面 1m 程度にやや多く沈着、均質 (地山)

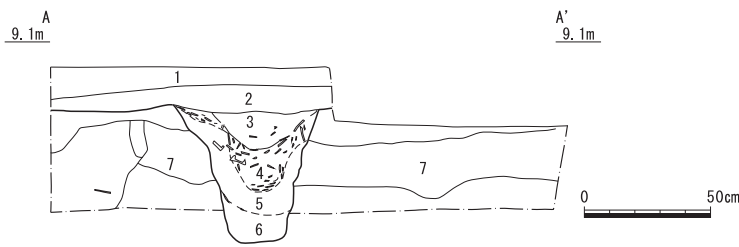


2. SK13 遺物出土状況図・断面図 (S=1:30)



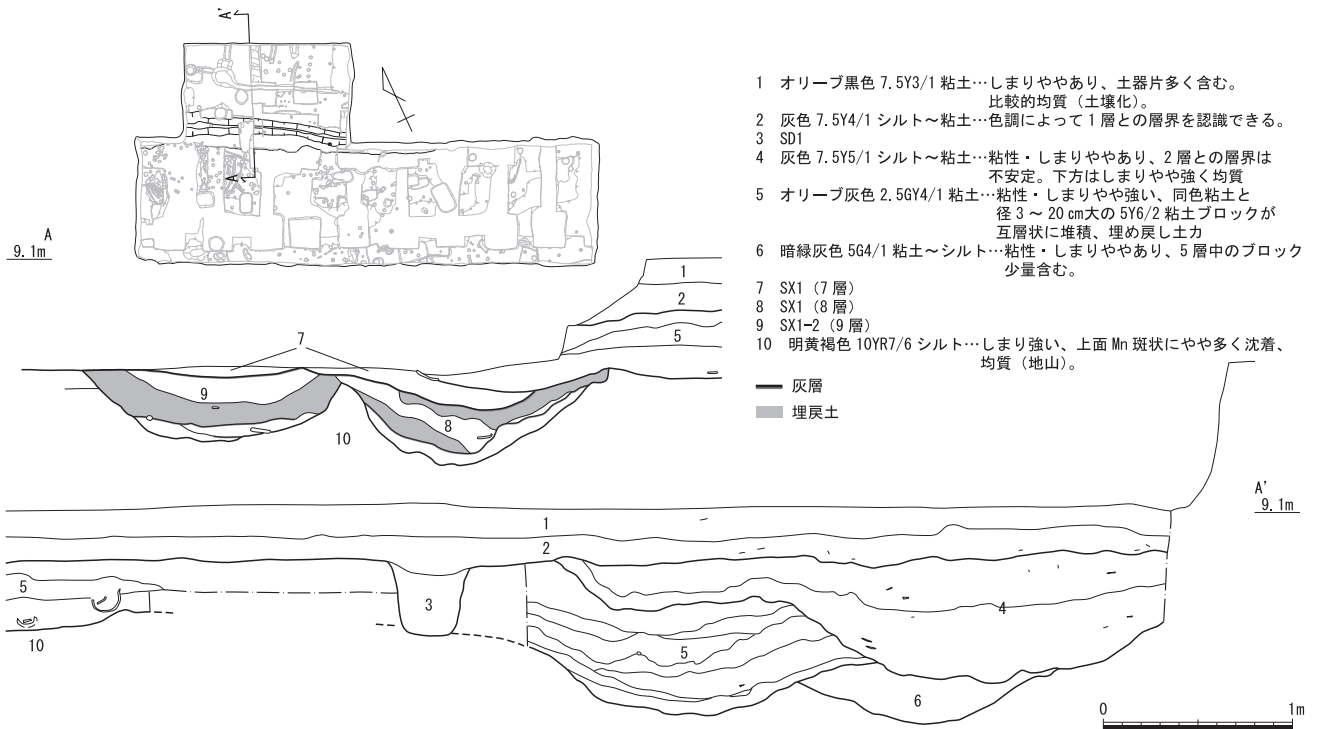
- 1 オリーブ黒色 10Y3/1 シルト…しまりややあり、比較的均質、土器片少量含む。
- 2 炭層
- 3 黒色 10Y2/1 粘土…粘性やや強い、しまりややあり（1層との層界はしまり強い）、比較的均質。
- 4 黒色 10Y2/1 粘土…3層に近いが、層界に炭層を挟む。
- 5 オリーブ黒色 7.5Y3/1 粘土…しまりややあり、土器片多く含む。比較的均質（土層化）。

1. SK19 遺物出土状況図・断面図 (S=1:40)



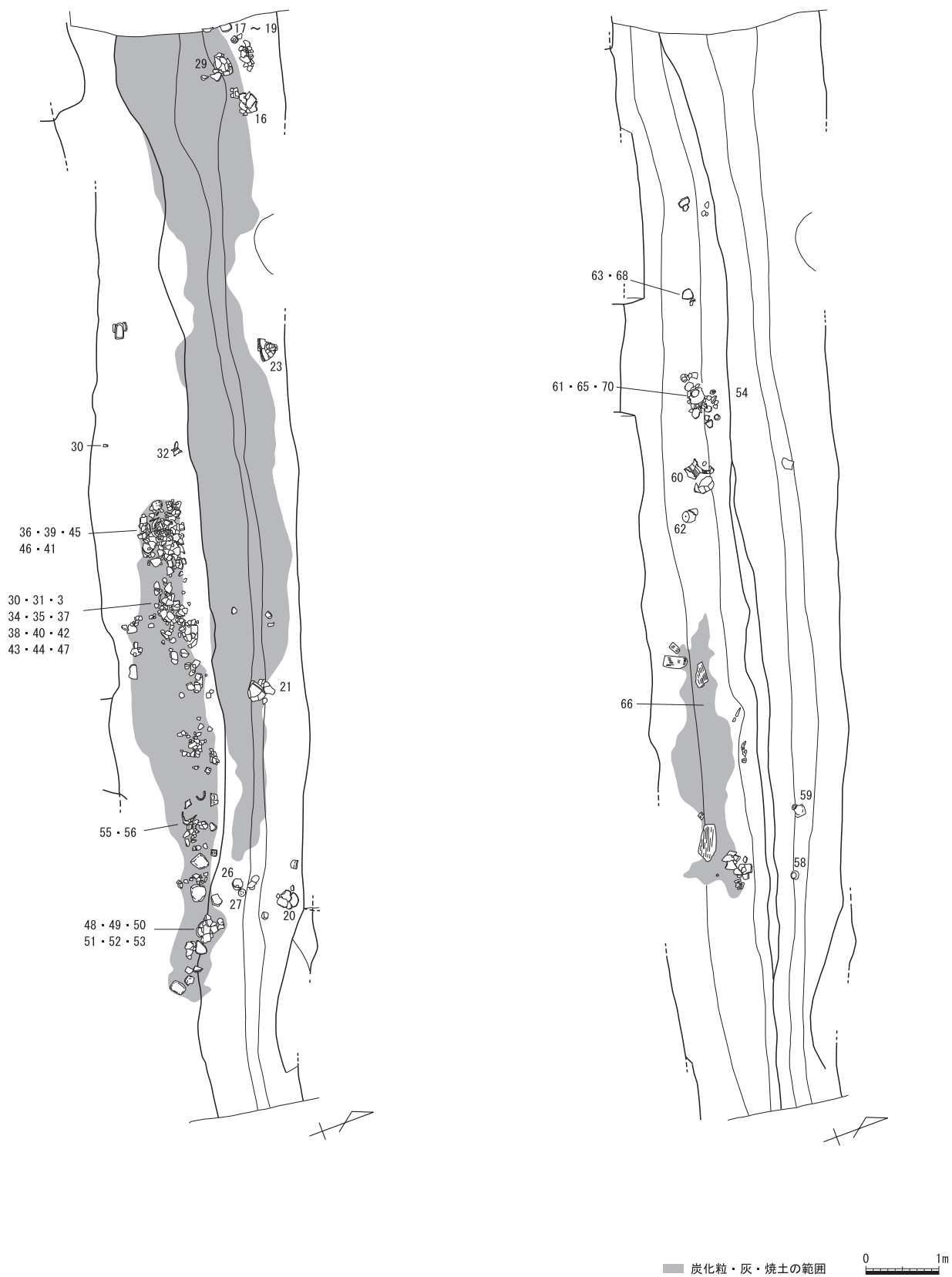
- 1 オリーブ黒色 7.5Y3/1 粘土…しまりややあり、土器片多く含む。比較的均質（土層化）。
- 2 灰色 7.5Y4/1 シルト～粘土…色調によって1層との層界を認識できる。
- 3 オリーブ黒色 5Y3/1 粘土…粘性・しまりややあり、土器を含む以外は比較的均質。土器片を非常に多く含む。
- 4 3層下面の土器片の堆積状況で層界を認識できる。
- 5 分層方法は4層と同じ。
- 6 質は3層に近い。
- 7 オリーブ灰色 2.5GY4/1 粘土…粘性・しまりやや強い、同色粘土と径3～20cm大の5Y6/2粘土ブロックが互層状に堆積、埋め戻し土カ

2. SD1・SK13 遺物出土状況図 (S=1:80)、断面図 (S=1:30)

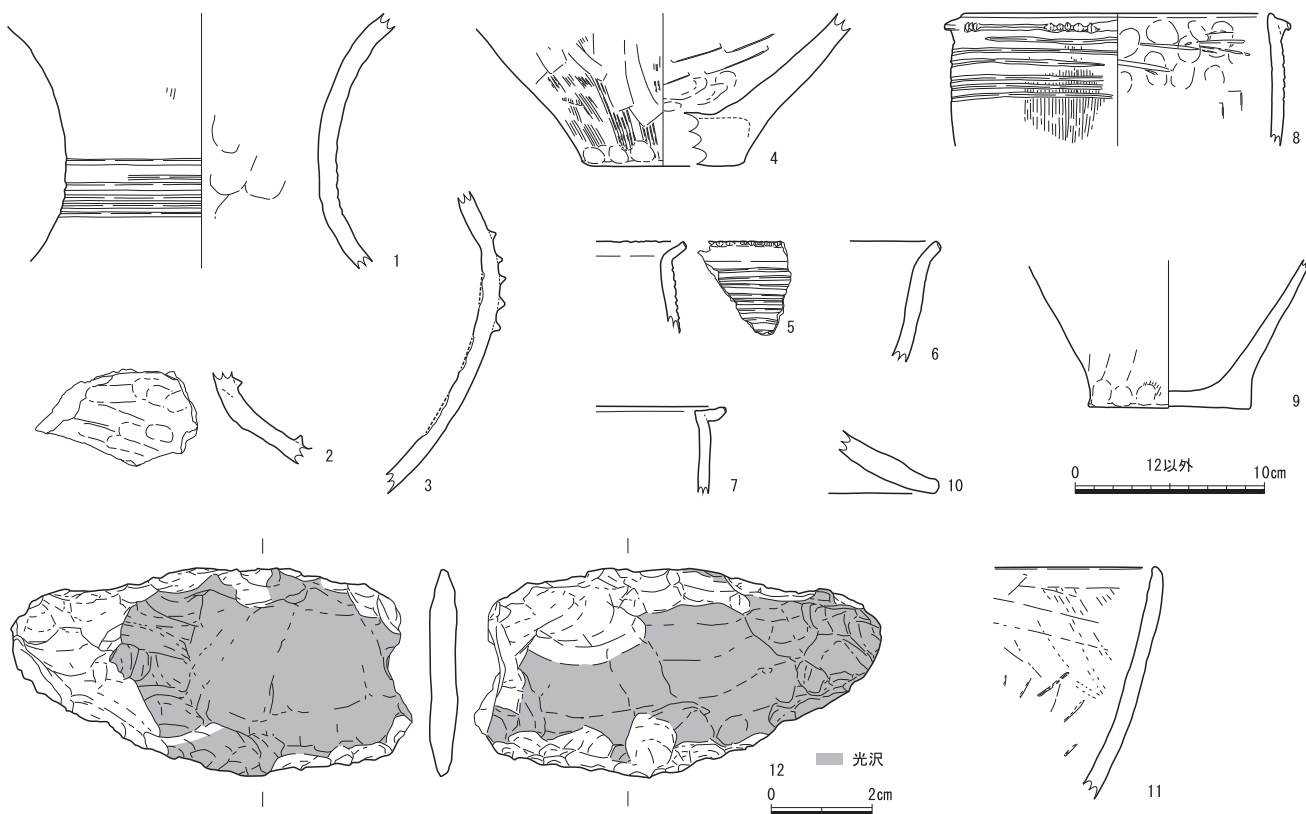


- 1 オリーブ黒色 7.5Y3/1 粘土…しまりややあり、土器片多く含む。比較的均質（土層化）。
- 2 灰色 7.5Y4/1 シルト～粘土…色調によって1層との層界を認識できる。
- 3 SD1
- 4 灰色 7.5Y5/1 シルト～粘土…粘性・しまりややあり、2層との層界は不安定。下方はしまりやや強く均質
- 5 オリーブ灰色 2.5GY4/1 粘土…粘性・しまりやや強い、同色粘土と径3～20cm大の5Y6/2粘土ブロックが互層状に堆積、埋め戻し土カ
- 6 暗緑灰色 5G4/1 粘土～シルト…粘性・しまりややあり、5層中のブロック少量含む。
- 7 SX1 (7層)
- 8 SX1 (8層)
- 9 SX1-2 (9層)
- 10 明黄褐色 10YR7/6 シルト…しまり強い、上面 Mn 斑状にやや多く沈着、均質（地山）。

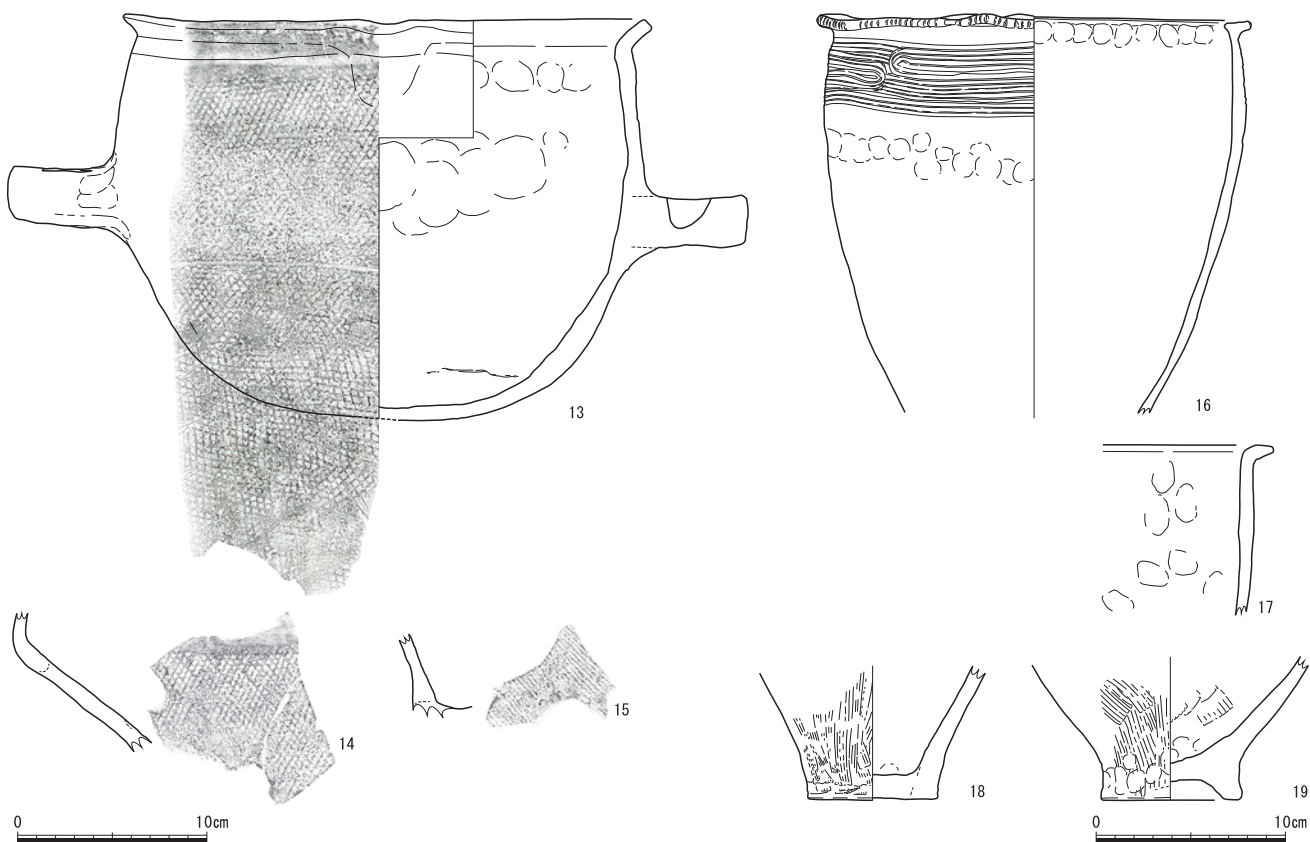
3. 調査区北半中央トレンチ断面図 (S=1:40)



4. SX1、7・8層（左）、9層（右） 遺物出土状況図（S=1:80）

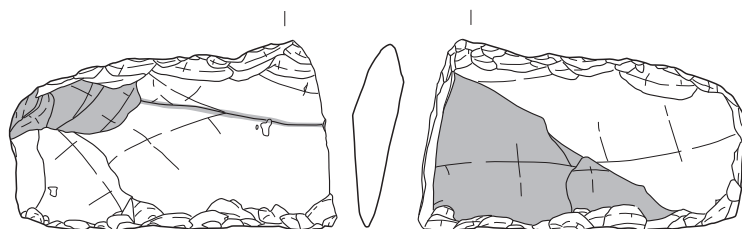
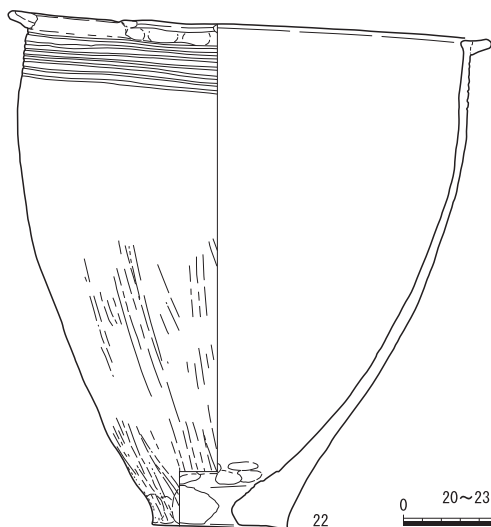
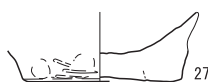
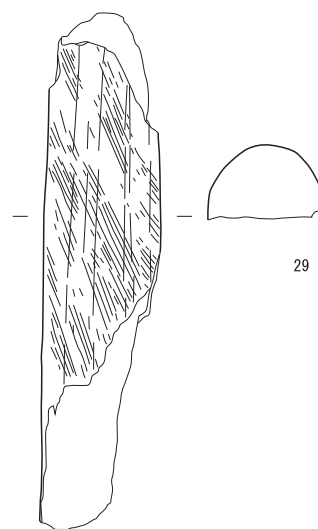
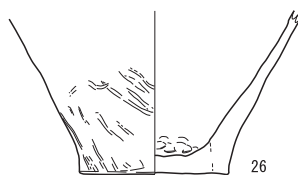
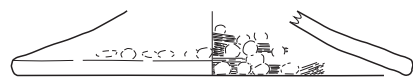
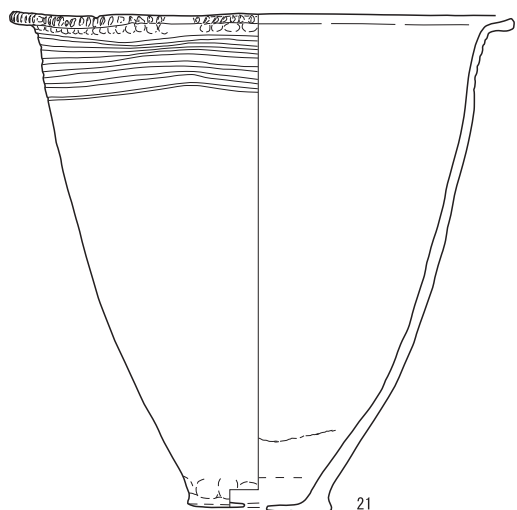
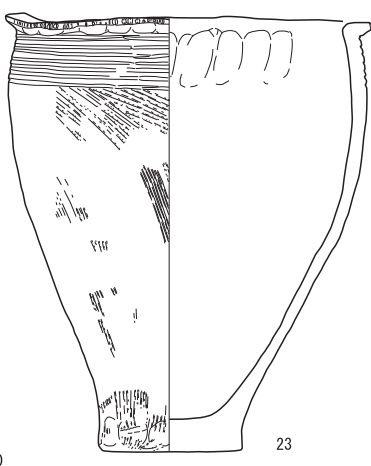
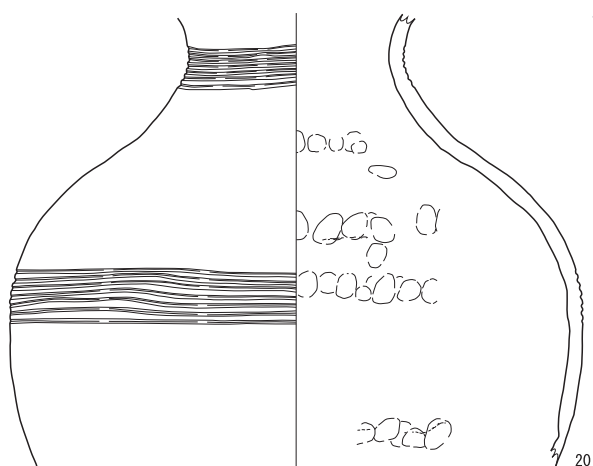


1. SH1 出土土器 (S=1:4) ・石器 (S=2:3)



2. SK38 出土土器 (S=1:4)

3. SX1 7層 出土土器 (1) (S=1:4)



0 20~23 · 26~28 10cm

0 25 5cm

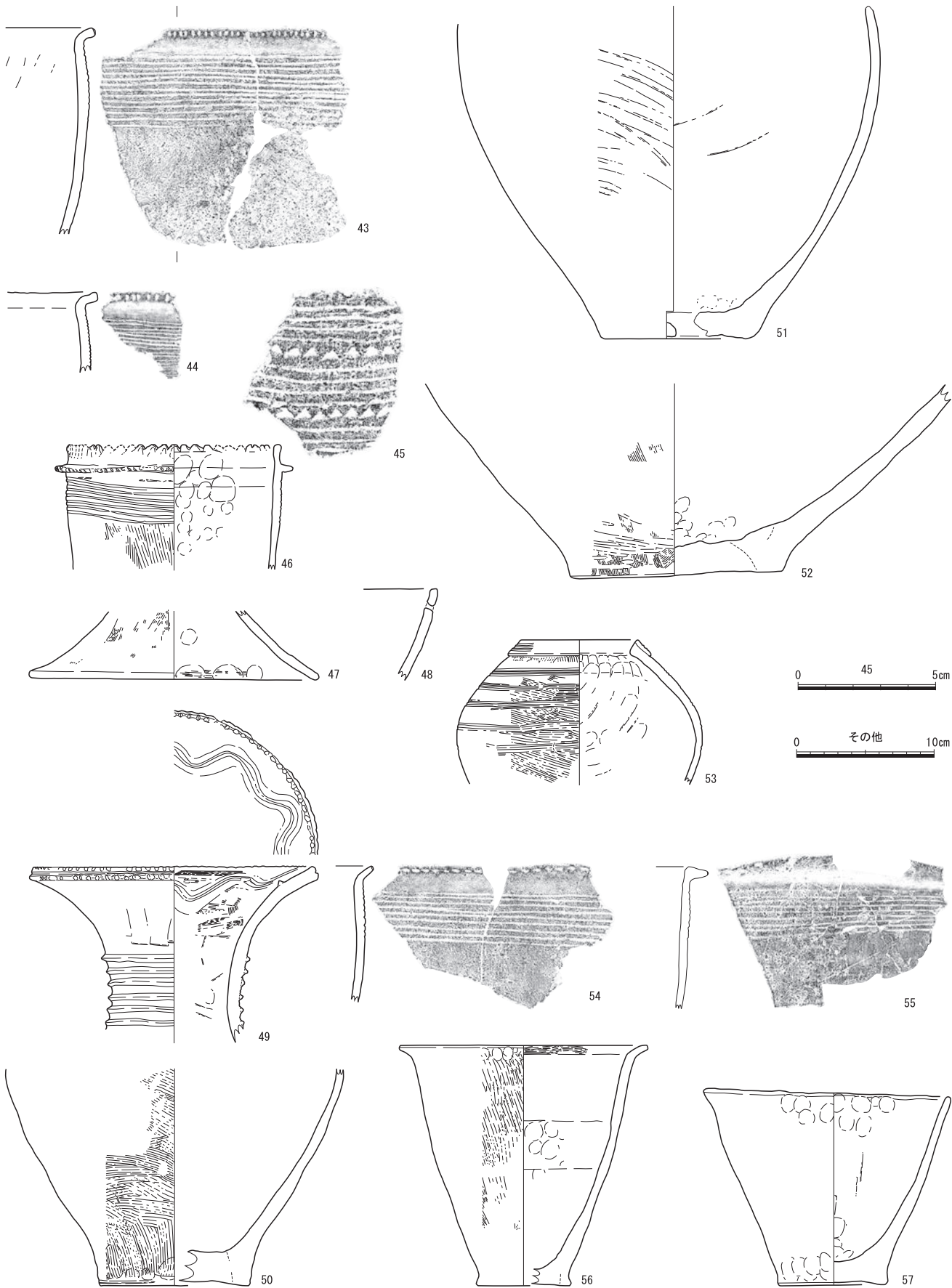
0 29 · 30 5cm

■ 光沢

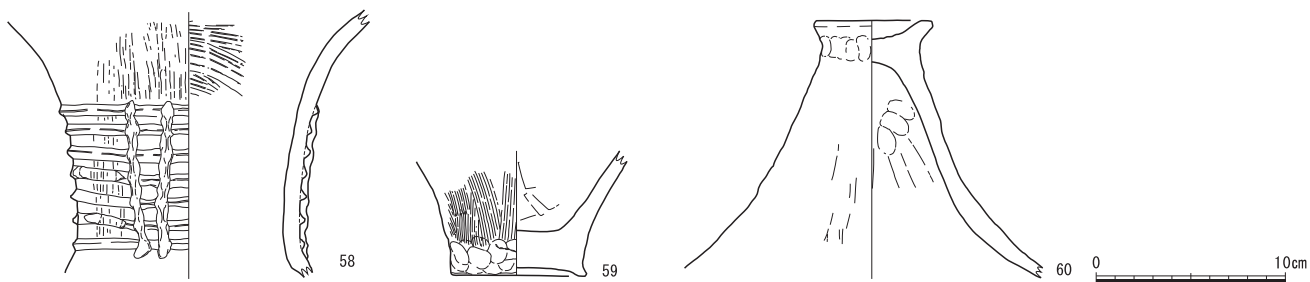
5. SX1 7層 出土土器 (2) (S=1:4 · S=1:2) · 出土石器 (S=2:3)



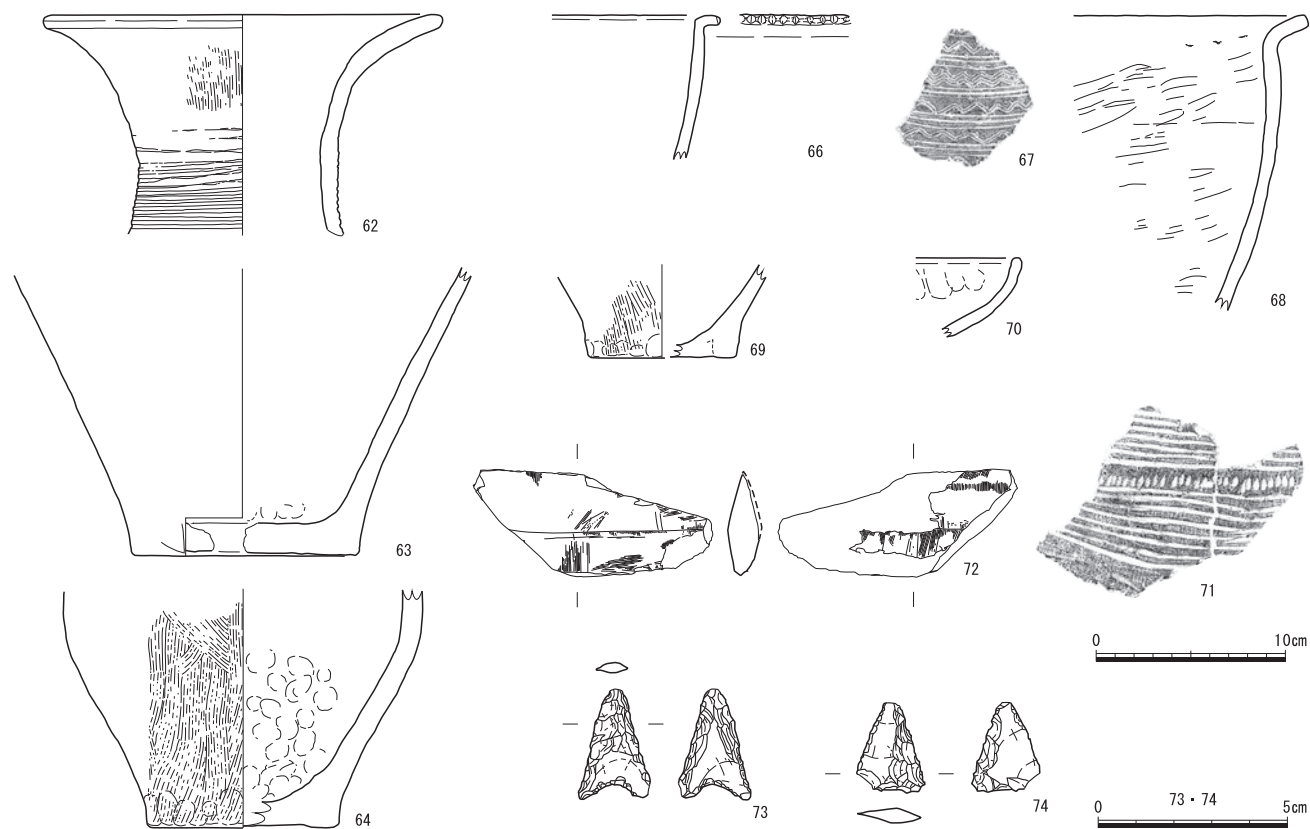
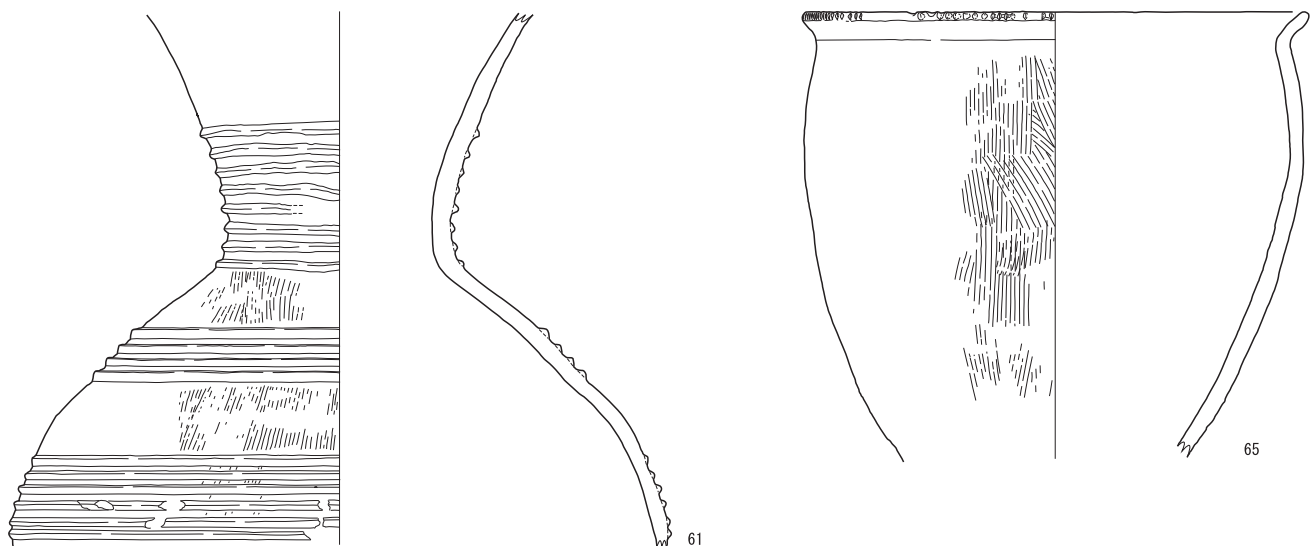
5. SX1 7層 出土土器 (3) (S=1:4・S=1:2)



6. SX1 7層 出土土器 (4) (S=1:4・S=1:2)



1. SX1 8層 出土土器 (S=1:4)



2. SX1 9層 出土土器・石器 (S=1:4・S=1:2)



1. 2次調査 調査区全景（西から）



2. 2次調査出土石器



3. 2次調査出土広口壺



調査区全景（南東から）





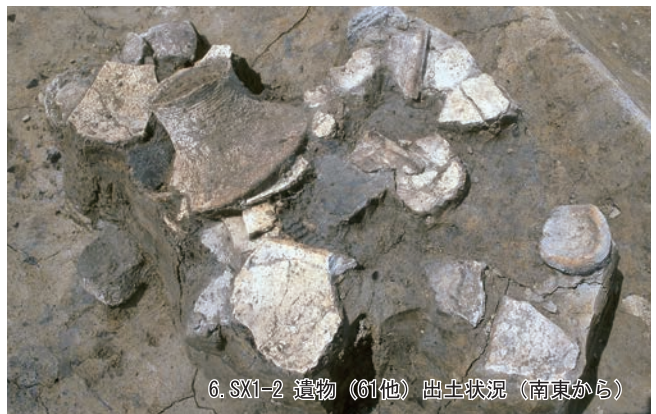
1. SH1 遺物出土状況（北西から）

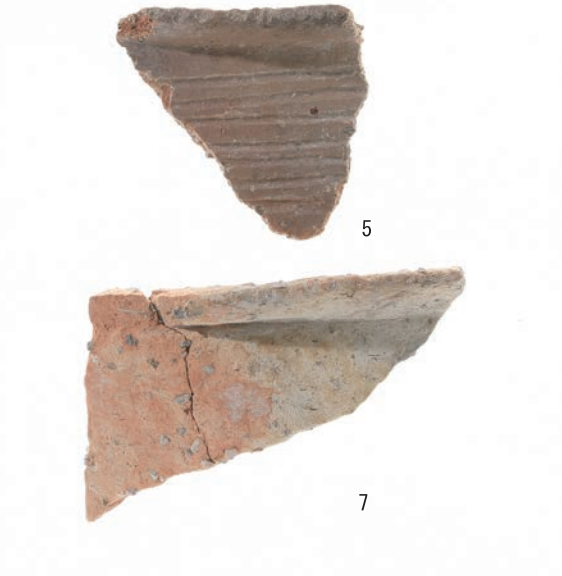


2. SH13 炭材・焼土検出状況（北東から）











14



21



15



16



20



22



23



24



27



29



31



32



30



34



30



36



46



44



54



49



57



58



67



60



71



72



72

報告書抄録

ふりがな	とよさわいせき							
書名	豊沢遺跡							
副書名	第12次発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第76集							
編著者名	福井 優							
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター							
所在地	〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1 TEL (079) 252-3950							
発行年月日	平成31年(2019年)3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
とよさわいせき 豊沢遺跡	ひょうごけんひめじし 兵庫県姫路市 とよさわちょう83ばんち 豊沢町83番地	28201	020457	34° 49' 37"	134° 41' 14"	2018. 5. 29 ～ 2018. 8. 4	604m ²	学校 建設
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			遺跡調査番号	
集落跡	弥生時代・ 古墳時代・中世	竪穴建物・土坑・ ピット・溝		弥生土器・土師器・須恵器・ 石器			20180088	
要約	<p>弥生時代中期から古墳時代初頭の集落跡を調査し、竪穴建物・土坑・ピット・溝など多くの遺構を検出した。そのうち、弥生時代中期前葉のごく初期に埋没した溝状遺構では、数回にわたる火を伴う行為の痕跡がみられ、その度に埋められていることがわかった。埋土からは大量の土器等が出土した。出土した土器は市内でも他に例が少ない時期の資料として評価できる。また、伴出した粘板岩製の磨製刃器は石戈の可能性が指摘できる貴重な例といえる。それ以外に、中期後半の土坑などからも夥しい量の土器が出土したことから、今回の事業地周辺が豊沢遺跡の中心地であった可能性がさらに高くなった。</p>							

姫路市埋蔵文化財センター調査報告第76集

豊沢遺跡

—第12次発掘調査報告書—

平成31年(2019年)3月31日発行

編 集 姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1
TEL (079) 252-3950

発 行 姫路市教育委員会
〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目1番地

印刷・製本 内海印刷株式会社
〒670-0808 兵庫県姫路市白国5-4-8

